

高岡の図書館

第112号

2026. 9. 1

編集・発行 高岡市立中央図書館（〒933-0023 富山県高岡市末広町1-7） TEL 0766 (20) 1818 FAX 0766 (20) 1819

誰もが読書を楽しめる社会へ

ー読書バリアフリーの推進ー

富山県立図書館館長 亀遊 知子

県立図書館の閲覧室に「大活字本コーナー」があります。大活字本は、その名のとおり大きな文字で印刷された本で、当館では約1,900冊を所蔵しています。先日、実際に借りて読んでみると、文字が大きくはっきりと見え、普段以上に読書に集中できました。「読みやすさ」は、読書を楽しむうえで大切な環境の一つであることを改めて実感しました。

近年、「読書バリアフリー」という言葉を耳にする機会が増えています。これは、「読書の方法は人それぞれ異なる」という前提のもと、誰もが自分に合った方法で読書を楽しめる社会を目指す取り組みです。

令和元年には読書バリアフリー法（正式名称：視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する法律）が施行され、障害の有無にかかわらず、すべての人がそれぞれに適した方法で読書を楽しめる環境づくりが進められています。

『1からわかる図書館の障害者サービス』の著者である佐藤聖一氏は、「あなたがもし高齢者や障害者になっても、『図書館の利用には何ら問題はありません。どうぞ今まで以上に利用してください』と言える図書館でなくてはならない」と述べています。この言葉は、誰もが安心して利用できる図書館のあるべき姿を端的に示したものだといえるでしょう。

県立図書館では、「多様な人・世代が集う魅力あるサービスの充実」を重点事項の一つに掲げ、誰もが利用しやすい読書環境づくりを進めています。今年度は、閲覧室に「読書バリアフリーコーナー」を設置し、LLブックや布絵本を展示するとともに、拡大読書器やデジタイズ図書再生機などの読書支援機器を整備しました。また、新たに作成した「読書バリアフリーパンフレット」は、県内の高校生がデザインを担当し、親しみやすく手に取りや

すいものとなりました。

さらに、電子書籍も3,400冊以上を提供しており、場所や時間を問わず利用できます。今後も利用者のニーズを踏まえながら、サービスのさらなる充実を図ってまいります。

こうした取り組みは、県立図書館だけで完結するものではありません。県内外の図書館や関連機関との連携・協働を通じて、地域全体で読書環境の向上を図っていくことが重要です。

さて、7月23日に当館で開催した特別支援学校の学校図書館担当教職員等向け読書バリアフリー説明会では、先にご案内した明治大学文学部兼任講師で元埼玉県立久喜図書館司書の佐藤聖一氏と、長野県の特別支援学校教諭の森祐子氏にご講演いただきました。

佐藤先生は、著書で示された「誰もが安心して利用できる図書館」という理念を踏まえ、『リンゴの棚』は、すべての市民のためのコーナーと捉えること、そして「図書館はもっと利用者に近づいていかななくてはならない」と話されました。その言葉は、私たちが進める読書環境の充実にも通じるものであり、利用者に寄り添い、自ら利用者に近づいていく姿勢の大切さを改めて認識する機会となりました。

また、森先生からは、本を通して多様な学びが生まれること、そして子どもたちが学校で本や図書館と出会うことの大切さについてお話しいただき、大変有意義な説明会となりました。

図書館には、人と本、人と情報、人と地域をつなぐ役割があります。これからも、各館や関係機関との連携・協働を大切にしながら、利用者一人ひとりが自分に合った方法で読書や情報に親しみ、知識や文化を享受できる環境づくりを進めてまいります。

伊勢御師 —高岡での活躍を探る—

元高岡市立博物館長 晒 谷 和 子

—江戸期まで伊勢神宮の信仰拡大に伊勢御師が大活躍していた。坂下町の古木太神宮、木町神社、二上神明社の史料から伊勢御師を追跡！—

1 高岡の男伊達 冷や飯馳走候

江戸期、高岡町には困っている人に手をさしのべる奇人な人が何人もいた。

ある年のこと、越後からの伊勢参りの一行が高岡町を通っていたところ、大雨続きで千保川の橋が落ち先へ進めなくなっていた。路銀に差支えが生じ、宿もとれず人家の軒下に寝起きし、昼も大雨で寄進を求めて回ることもできない人々が出てきた。

一番町の太田屋甚右衛門が洪水の様子を見にでかけると、20人ばかり腹を空かせ孤をゆすって悲しげに故郷を慕って泣いていた。それを目にした甚右衛門は涙を流して不憫がり「冷や飯でも馳走しよう」と家に招いて振舞った。飯にあずかった人達は、「今、生き返ったようだ」と厚く喜んだそうだ。20人もの冷や飯、それも夜のことで奥さんは隣近所や親戚から借り集めて賄ったという。気づきが良くてお洒落な甚右衛門さんの逸話は数多い。①

2 柄杓1本もって伊勢参宮

一番町の太田屋の祖先は、加賀前田家二代前田利長の高岡築城に従って高岡へ来たあと、商人になったと伝える。今も一番町に在住の宮崎甚一氏がご子孫である。冷や飯を振舞った甚右衛門の没年が宝暦3年(1753)、冷や飯を馳走したのは273年以上、昔である。

明和8年(1771)の「おかげまいり」(江戸時代に日本各地で爆発的に流行した、伊勢神宮への大規模な集団参詣)を記録した「森壺仙の『日記』」には、また越後、越前、常陸、武蔵など、はるかなる東路よりも多くもうでく。……門ごとに物乞などするもあり…」②とある。伊勢参りには報謝の施行があった。同年のお陰まいりには、大商人が銭や金、米、笠を施行し、街道では籠や船に無料で乗せ、旅籠では終い風呂に入れさせた。柄杓1本持って施行を当てに、あるいは道中賃稼ぎをしながら伊勢へ行った人もいた。

3 高岡から伊勢参りに行った人の記録

江戸期、高岡からの伊勢参宮の記録は少な

い。一人目は高岡の俳人で、初めて蕉風の俳句を導入した竹内十丈である。元禄9年(1696)秋、「伊勢の国をはしめて風雅の友達を尋ね俳句を詠んだ。伊勢から京へ出、難波、大津で木曾塚に参拝し、彦根、金沢を経て高岡へ戻っている。同14年『射水川』(俳句集)③を出版した。

二人目は中川村の庄三郎である。十村・南善左衛門の手代(肝煎)で、寛政2年(1790)、38日をかけて伊勢を始め、京の祇園祭や大坂・奈良の寺社参詣、吉野・大峰山など山岳修験の名所・旧跡も訪れ「伊勢参宮道中覚帳」④を綴った。庄三郎の子孫は中川に在住の塚本家である。

三人目は高岡の一番町に住んだ蘭方医、長崎家5代浩斎。文化11年(1814)、16才の4月朔日、名古屋へ向かい大垣の山車祭、名古屋祭をみて、伊勢参詣後、大和を巡り奈良へ出て寺社巡り、それから京へ行き20日間逗留。賀川玄岱翁を尋ねて産科を学ぶ。さらに大坂を見物し、6月朔日、帰宅した⑤⑥。見学と勉強に2カ月もかけた遊学であった。

この他にも多くの人が伊勢参りに行っているはずだが、目にした史料は以上である。

4 伊勢御師の活躍

日本中から6人に1人が伊勢へ参宮したお陰参りの背景を探てみると、伊勢御師の活躍が大きかったことに気づく。伊勢御師は皇大神宮(内宮)、豊受大神宮(外宮)の各々に所属し、参詣者を誘導、祈祷・宿泊などの世話をする者をいった。今でいうツアーコンダクターが祈祷お祓いもするようなものであろうか。

伊勢御師は鎌倉時代末期以降、特に活発に活動し、室町時代には領主を通じて領内の農民を檀那とするようになった。御師自ら檀那の処に赴いて参詣をすすめ、お祓・大麻(神社から授ける神札)を配布、ほかにも扇・帯・茶・白粉などを檀那に提供し、貨幣や米などを檀那から受け取った。

なんと！高岡へも伊勢御師が布教にきた史料が残っていた。

(1) 坂下町 古木太神宮の夏祭り

坂下町では、例年8月2日に古木太神宮の夏祭りを執行される。極楽寺(浄土宗)僧侶

の読経のあと、関野神社神主が祝詞・お祓をする神仏混淆の片鱗を伝える珍しい祭である。

この祭りの起源は古い。江戸期は極楽寺で執り行っていたが、明治4年(1871)、政府の神仏分離政策によるものかご神体や縁起などが極楽寺から町へ譲渡され、町の祭として運営されている。

「枯木神明略縁起」(旧縁起)によると「木町の傍ら(開発村)に往昔より神廟の旧地があった。年月を経、大木の松2株、杉1株のみ残った。天和元年(1681)3株とも枯れ、正覚という沙門に伐らせたところ、杉の正真に「太神宮」の3文字が顕れ、この地はもと神明の垂迹であることを知った。その後、元禄10年(1697)縁あって極楽寺に安置、享保20年(1735)国主(加賀藩主)の拝覧に達した」

また「太神宮縁起」(新縁起)には、「杉の元に、毎年伊勢より祓いを納めに来て年久しい」とあって、遅くとも江戸期前半には、神廟の旧地の杉の元に伊勢御師が祓いにきていたと考えられる。



坂下町 古木太神宮の夏祭り (2026/8/2)



さらに、古木太神宮の旧地、開発村の田地に、木町神社の神明社があった。

(2) 木町神社にみる伊勢御師の活躍

木町神社は天照大神を祀る神明社と、菅原道真大神及び前田利長命を祀る天満宮を合祀し、宝蔵庫に伊勢御師の活躍を示す「棟札」が保存される。

表面には「当所(木町)の神明宮は、祈禱師二見大夫が拝領している神社である。当初は領家村(開発村)の田地の内にあった。寛文5年(1665)木町東側外地に移った。その時は藩の寺社帳に搭載されていなかった。正徳2年(1712)従四位上度会神主二見大夫忠貞の代官であった安田方重が寺社奉行に訴願し、正式に寺社帳登載の神社となった。…」⑦(度会神主は豊受大神宮(外宮)に属する伊勢御師) なお、裏面には、「正四位上度会神主常珍 檜垣二見大夫代官 安田吉左衛門重賢(花押)」の銘がある。

伊勢御師が寺社奉行に働きかけ、寺社帳に掲載された。その政治的な活躍を目のあたり

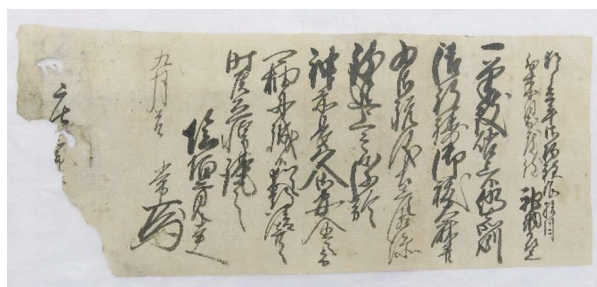
にできる。

さらに伊勢御師の足跡は小矢部川を挟んだ木町の向い、二上神明社にもあった。

(3) 二上神明社の神納帳

二上神明社へ祈禱^{花押}に来ていた伊勢の御師「檜垣二見太夫常□」から二上村庄三郎にあてた「神納帳」⑧が、分家の大菅豊家に保存されていた。

「嘉例によってご祈禱お祓大麻並びに、ご祝儀として土産を添えて進上します。いよいよ神前において長久御安全の旨、丹誠を尽くします。猶、去年初穂銀10目到来し、目出度く神納しました。九月吉日」



伊勢御師 檜垣二見太夫神納帳

(二上・大菅豊氏旧蔵 高岡市立博物館蔵)

伊勢御師が毎年二上神明社へお祓大麻と土産をもって祈禱にきた証拠の品である。

加えて二上神明社書上⑨が同家にあった。「由緒 慶長元年丙申三月三日開基仕 伊勢国度会郡山田檜垣二見太夫受持ニテ 従来相勤」と記される。慶長元年(1596)、3月3日創始とされるこの神明社は、伊勢国度会郡山田の檜垣二見太夫の布教活動によるものと解釈できる。

以上3点の史料から、高岡での布教の一端を知り、とりわけ豊受大神宮(外宮)に属する度会神主・檜垣二見太夫が足を運んだことを確認した。

郷土史の不思議発見の鍵は皆さんのお宅の仏壇や神棚、蔵などにひっそり眠っているかもしれません。

※①文中の()は筆者が付した。②「枯木太神宮」「古木太神宮」は原文のママとした。③「太夫」「大夫」は原文のママとした。

※出典

①『高岡湯話(現代語訳)』富田徳風著・篠島満訳 ②『「おかげまいり」と「ええじゃないか」』藤谷俊雄著 ③『定本 射水川』市立高岡図書館 ④「伊勢参宮道中覚帳」中川村庄三郎 ⑤『浩斎雑録』長崎浩斎 ⑥『折肱録』長崎浩斎 ⑦『利長公と木町』木町自治会 ⑧「伊勢御師 檜垣二見太夫神納帳」⑨「天照皇大神宮遙拝所(神明宮) 書上」大菅庄三郎④⑧⑨は高岡市立博物館蔵

ふるさと情報コーナー

高岡関係資料情報

令和6年度に発行された図書、雑誌及び新聞に掲載された高岡関係資料のうち、図書館で把握できた文献の一部を紹介いたします。配列は資料の種類（図書・雑誌・新聞）順とし、出版年月の順に上から記し、左から資料名・論題名・執筆者名（敬称略）・巻号数の順に記載しました。

堀田善衛研究論集 世界を見据えた文学と思想

（堀田善衛の会 企画竹内栄美子編集 桂書房刊 令和6年6月）

風を抱く 米田憲三歌集

（米田憲三著 青磁社刊 令和6年7月）

夢を叶えるおうち起業 子育てママのわくわくビジネスライフ

（杉江景子著 合同フォレスト刊 令和6年9月）

リスボン日和 十歳の娘と十歳だった私が歩くやさしいまち

（イムキョンソン著 熊木勉訳 日之出出版刊 令和6年9月）

新しい、美しい日本の図書館

（立野井一恵著 エクスナレッジ刊 令和6年10月）

日本、ヤバい。「いいね」と「コスパ」を捨てる新しい生き方のススメ

（モーリー・ロバートソン著 文藝春秋刊 令和6年10月）

洛中洛外図屏風勝興寺本 近世初頭の京を歩く

（針山康雄著 桂書房刊 令和6年12月）

高岡市史料集第36号 長崎家資料より

（高岡市立中央図書館編刊 令和7年3月）

高岡市万葉歴史館紀要 第35号

（高岡市万葉歴史館編刊 令和7年3月）

国宝雲龍山勝興寺

（勝興寺文化財保存・活用事業団編刊 令和7年3月）

町並み保存の記録24 高岡市重要伝統的建造物群保存地区

（高岡市教育委員会編刊 令和7年3月）

国宝勝興寺を訪ねて

（Takt Selection9号 令和6年5月）

高岡市立中央図書館

（図書館ウォーカー2 令和6年5月）

わがまちふるさと創生8 里山活性化協議会

（富山県人1327号 令和6年5月）

気多神社、大伴神社と気多の杜高志のみはらし 万葉の世界で富山湾を眺める

（グッドラックとやま558号 令和6年5月）

雨晴海岸 富山湾と立山連峰の絶景と共に楽しむ

（Civil Engineering Consultant304号 令和6年7月）

富山の偉人物語 セメダイン株式会社創業者今村善次郎氏

（富山県人1330号 令和6年8月）

重要伝統的建造物群保存地区 高岡市山町筋(商家町) 高岡市金屋町(鋳物師町) 高岡市吉久(在郷町)

（ふるさと再発見の旅 東海北陸 令和6年10月）

高岡古城公園

（グッドラックとやま567号 令和7年2月）

大妻良馬先生宮内省内匠寮時代(高岡市にある後醍醐天皇皇子である恒性皇子御墓の築造について)

（大妻コタカのすべて 法人設立50周年記念誌「ふるさと」合本版 令和7年3月）

文化財活用50周年の思い本に 高岡市美術館長村上氏 国宝・勝興寺で文楽「理想的」

（読売新聞 令和6年4月13日）

利長の書状10通発見 高岡市立博物館 特産「越中布」売買指示

（北日本新聞 令和7年1月10日）

スマホ版図書館カード導入 高岡市図書 検索機能も一新

（中日新聞 令和7年3月4日）

菅野家住宅 土蔵造り豪商の気概(建築探訪)

（読売新聞 令和7年3月26日）

富山県立図書館ホームページ「とやまの本」及び「県内記事情報検索」より

||||| 調査相談の窓口から |||||

…… おたずねくださいQ&A (中田図書館) ……

利用者の皆様から寄せられる質問は郷土関係だけではなく、身近な生活の中での素朴な疑問も多くみられます。様々な質問や相談に対して、できる限りの資料を提示してお答えしたいと思っています。どうぞお気軽に声をかけてください。

レファレンスの例

Q： 中田小学校跡地がどうなっているか知りたい。

A：「中田教場」の跡地には、中田コミュニティセンター等がある。また、「般若野教場」の跡地には、認定こども園般若野保育園がある。

中田に小学校ができたのは、明治6年である。後の「中田小学校」と「般若野小学校」である。

昭和39年にこの2校を統合して「中田町立中田小学校」が発足したが、校舎は「中田教場」と「般若野教場」のままであった。

昭和41年に中田町が高岡市へ編入合併し、「高岡市立中田小学校」と改まり、今の常国の校舎に移転した。

「中田教場」であった「旧 中田小学校」の跡地には、高岡市役所中田支所を併設した中田福祉会館が建設された。その後、平成22年に中田コミュニティセンターが新築された。

一方、「般若野教場」であった「般若野小学校」の跡地には、養護老人ホーム長生寮が建設された。長生寮移転後、平成13年に般若野保育園が移設された。

参考資料：

「中田町誌」「下山田村誌」

「中田っ子のあゆみⅡ 統合五十周年をふりかえって」

「未来を見つめて 高岡市・中田町合併50周年記念誌」

「富山県高岡市旧中田町役場建造物調査報告書編集写真・図面」

Q：童謡「蛍」に、「^{やなぎ}蛍のやどは川ばた楊」という歌詞がある。「楊」と「柳」はどう違うのか。柳というと、「しだれ柳」を思うのだが…。

A：ヤナギの漢字表記には、「柳」と「楊」がある。「柳」はヤナギ科の総称、特にシダレヤナギをさし、「楊」は、カワヤナギのように枝は垂れず、上向きになるものをいう。

ヤナギは、ヤナギ科ヤナギ属に属する植物の総称で世界に450種類以上ある。日本には30種ほどある。シダレヤナギは、「奈良時代に中国から日本に渡来し、もともとヤナギといえはこの種をさす」との記載もあった。

ちなみに、ヤナギの枝で作られた物に「^{ようじ}楊枝」や越中売薬行商の「^{やなぎこうり}柳行李」もある。

参考資料：

「総合百科事典ポプラディア」

「学研現代標準漢和辞典」

「富山の植物 風土と四季を訪ねて」

Q：中田の常夜灯について知りたい。

A：弘化二年(1845)の銘のある石灯籠が、中田町の常国神社にある。

「寛文九年(1669)九月以降、中田の舟渡しが賑わうこととなり…中田の渡船場の両詰に常夜灯が設けられていた。明治21年(1888)、庄川に始めて木橋(当時雄神橋と称した)が架けられ、兩岸にあった常夜灯が不要となったのを、常国へ譲り受けることになった。」とある。

参考資料

「中田町誌」

「未来を見つめて 高岡市・中田町合併50周年記念誌」

「たかおか歴史との出会い 高岡市市政100周年記念誌」

中田図書館では、令和7年度に「中田に関する本コーナー」を設置しました。その後、郷土について関心をもち、資料を手取る方が増えたように感じます。また、前述の「常夜灯」のように、子供たちが総合的な学習の時間の課題として、郷土に関わる資料を探しに来館する姿も見かけます。資料集めから現地での調査活動へと、探究的な学習につながることを期待しています。

「中田に関する本コーナー」では、名所や記念物等が探しやすいよう、本にページやタイトルを書いた葉をはさんでいます。ご利用に少しでも役立てば幸いです。

(石浦 智恵 記)

新高岡市誕生 20 周年関連事業 高岡の伝承紙芝居デジタル化事業

ふるさと高岡に語り継がれる民話をより広く知ってもらうとともに、子どもたちへのふるさと教育の推進につなげるため、旧高岡市及び旧福岡町で作成された伝承紙芝居をデジタル化し、音声をつけた動画を公開しました。

❖ 伝承紙芝居とは

町に伝わる民話を在住者等に直接採集し、それらをもとに紙芝居を作成したものです。旧高岡市については「高岡の伝承」（高岡市児童文化協会編著、1979 年）をもとに、旧福岡町については読書サークル「花野」（現在の花野読書会）と福岡児童館を利用する子どもたちにより作成したものです。

❖ デジタル化

紙芝居をスキャンし、できあがった画像データに語りの音声を乗せました。語り手（演者）は、日頃から図書館で読み聞かせを行っているボランティアの皆さんに依頼。紙芝居講習会に参加後、音源収録を行いました。動画は高岡市公式 Youtube、「たかおか電子図書館」にアクセスしご覧いただけます。

❖ 紙芝居一覧

No.	タイトル名	地区・場所など	No.	タイトル名	地区・場所など
1	竜女とおほり	定塚・古城公園	19	もみじ姫伝説	太田
2	元取山の童子	福岡・福岡町鳥倉	20	七軒百姓	福岡・福岡町沢川
3	うたれたこま犬	国吉・月野谷	21	三千坊のうわばみ	国吉
4	カッパとあやまち寺	牧野・上牧野	22	寺を運んだ黒助	中田
5	都わすれ	福岡・福岡町舞谷	23	一步のぼだい樹	福岡・福岡町一步二歩
6	勝興寺の七不思議	伏木・伏木古国府	24	ポンポン山	定塚・古定塚
7	ガメの教えてくれた五肝妙薬	戸出・戸出市野瀬	25	りゅうと梅の伝説	国吉・手洗野
8	洞窟の孫衛門	福岡・福岡町上向田	26	木舟城	福岡・福岡町木舟
9	七本杉のてんぐ	定塚・末広町	27	火事からお寺を守った太子さま	石堤・麻生谷
10	悪王子の伝説	二上・二上山	28	行者の雨乞い	戸出・戸出光明寺
11	宇太郎さんのこぼなし	福岡・福岡町上向田	29	むくろじの仏	福岡・福岡町小野
12	守山城の伝説	守山・二上山	30	川がにと竹やぶ	能町
13	和田のたばこ入れ	福田・和田	31	光釜の伝説	佐野・紅屋
14	弘法の目薬	福岡・福岡町枳丘	32	赤丸のおおむかで	福岡・福岡町鞍馬寺
15	高岡御車山	平米、博労	33	七駄片馬	国吉・笹八口
16	塩売石	国吉・五十辺	34	刀自女と和磨	中田
17	ははみず	福岡・福岡町沢川	35	結城七郎四郎宗俊	福岡
18	高峰譲吉	平米・御馬出町	※紙芝居の現物は中央図書館と福岡図書館に所蔵しています。		

ぜひご覧ください！

高岡市公式 Youtube

たかおか電子図書館



育て、編み、繋ぐ —福岡町の菅笠作り—

福岡町は、日本の伝統的な雨除け・日除け道具である「菅笠（すげがさ）」の国内最大の産地である。現在でも全国シェアの約9割を占める「越中福岡の菅笠」は、400年以上の歴史があり、その卓越した技術を現代に伝えている。

【暴れ川がもたらした自然の恵み】

福岡町での菅笠作りの歴史は、室町時代まで遡ると言われている。そのルーツは、この地を流れる「小矢部川」にあった。かつて小矢部川は度々氾濫を繰り返す暴れ川であり、その沿岸一帯には多くの泥沼地が形成されていた。こうした土地は稲作には適さなかったが、一方でこの湿潤な環境が菅笠の原材料となる良質な「スゲ（菅草）」の自生に最適な条件となった。この地域の人々は、身近に大量に自生するスゲを利用し、農閑期の副業として笠を縫い始めた。これが、福岡町における菅笠作りの始まりである。

【加賀藩の保護と産業化】

農村の副業であった菅笠作りが大きな産業へと発展したのは、江戸時代中期のことである。

寛文10年（1670年）頃、加賀藩5代藩主・前田綱紀は、この地域のスゲの質の高さに着目し、菅笠生産を藩の重要な産業として保護・奨励した。これによって自生スゲの採取から、計画的な「スゲ田」での栽培へと移行し、品質が飛躍的に向上した。

作られた菅笠は「加賀笠」の名で広く全国に出荷されるようになり、北前船などの流通網に乗って日本各地へと運ばれた。江戸時代後期には、福岡の地に「笠問屋」が誕生し、仲買人を介さず全国へ直接販売する体制も確立された。

【年間300万枚を生産した全盛期】

菅笠生産が全盛期を迎えたのは、幕末から明治時代にかけての時期である。

江戸中期までは仲買人が金沢へ運び販売していたが、江戸後期には福岡町に笠問屋ができ、商品を直接販売するようになった。幕末の元治元年（1864年）には、年間約210万枚

という驚異的な出荷記録が残されている。さらに明治時代に入ると、笠問屋の数は約60戸を数え、生産量は年間300万枚に達する一大産地へと成長した。明治12年の記録によると、福岡町の商人の実に3割が菅笠関係者であり、町全体の公共経費（万雑）の約3分の2を負担していた。まさに菅笠は、町の経済を豊かに支える心臓部であった。

この生産力を支えたのが、「スゲの栽培」から「菅笠の製作」「製品の出荷」に至るまでの分業システムである。

これらの工程が町全体で完全にシステム化され、高い品質を保ちながら大量に生産する仕組みが整えられていった。

【実用品から伝統的工芸品へ】

昭和30年代まで、菅笠は日本の農業や屋外作業に欠かせない実用品として年間100万枚以上が出荷されていた。しかし、その後の高度経済成長期における農業の機械化や、安価な帽子・化学繊維製品の普及により、実用品としての需要は激減する。

その一方で、福岡町の菅笠は「高い意匠性と品質」によって新たな価値が見出された。歴代天皇即位・大嘗祭の御菅蓋や、伊勢神宮式年遷宮の御料笠御笠・御翳にも福岡のスゲが使用されている。また、全国の伝統祭り（「おわら風の盆」や「阿波踊り」など）や民芸、伝統芸能の舞台に欠かせない道具として、唯一無二の地位を築いている。

400年前とほぼ変わらない形態で、スゲの栽培から完成までを一貫して地域内で継承している例は、他に類を見ない。その文化的価値が認められ、平成21年（2009年）には「越中福岡の菅笠製作技術」が国の重要無形民俗文化財に指定された。さらに平成29年（2017年）には、経済産業大臣指定の伝統的工芸品に選ばれ、日本遺産の構成文化財にも認定されている。

〈参考資料〉

「福岡町史」「福岡町の民俗」「語り継ぎたい昭和の福岡町」「福岡町の菅と菅笠」「越中福岡の菅笠」等
（沼田 和敏 記）

お知らせ



行事予定 (変更になる場合があります)

中央図書館

- えほんのじかん 毎週火～金曜日(休日を除く)
午前11時～15分程度
- えほんの広場 毎週土、日曜日、休日
午前11時～30分程度
- 土曜おはなし会 午後2時～2時30分
- 第1土曜日 高岡おはなしの会
第2土曜日 図書館ボランティアおはなし会
第3土曜日 チルドレンズシアター
(高岡第一学園幼稚園教諭・保育士養成所)ほか
第4土曜日 人形劇団どんぐりコロコロ
第5土曜日 劇団「喜び」

高岡市立図書館

公式インスタグラムはじめました

高岡市の図書館5館の取組やイベント等、図書館ならではの魅力等を広く発信しています。

ぜひフォローお願いします！



TAKAOKALIB

高岡の伝承紙芝居 公開しています

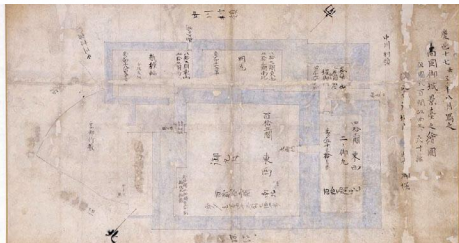
ふるさと高岡に語り継がれる民話をより広く知ってもらうとともに、子どもたちへのふるさと教育の推進につなげるため、旧高岡市及び旧福岡町で作成された伝承紙芝居をデジタル化し、市公式Youtube、「たかおか電子図書館」で公開しています。



企画展 高岡古城公園関連資料の展示

9月8日(火)～9月23日(水・祝)

加賀前田家二代前田利長が関野の地に高岡城を築かれて以来、410年余。「9・13」の開町記念日を交えた期間に、中央図書館所蔵の高岡城と古城公園に関する資料・文献を展示します。



高岡御城景台之絵図 写 一幅
慶長17年(1612)

伏木図書館

こども読み聞かせ会

毎週土曜日 午前11時～

戸出図書館

こども読み聞かせ会

毎週土曜日 午前11時～

中田図書館

こども読み聞かせ会

毎週土曜日 午前10時30分～

福岡図書館

おはなしの部屋(読み聞かせ等)

毎週土曜日 午前11時～

最新の実施状況は、図書館のホームページを確認するか、お電話などでお問合せください。

古文書関係の事業

○古文書解説事業

中央図書館所蔵の古文書を解説し、『高岡市史料集』として発刊しています。

○古文書を学ぶ会

中央図書館所蔵の古文書をテキストとして、近世の高岡の様子を学びます。今年度は、八十殿様御通行留「このへ様の御二男」北陸旅(逸見家文書より)をテーマに取り上げ、年4回開催します。

午前10時～11時30分(受講受付は締切しました)

○高岡市史料集解説講座

今年度は、11月14日(土)に開催予定。毎年3月末頃発刊の『高岡市史料集』の解説文に基づき解説します。「市民と市政」11月号などをご覧ください。

「高岡の魅力発信 デジタルアーカイブ事業」

中央図書館が所蔵する江戸期以降の郷土史を知るのに貴重な古文書や写真をアーカイブ化し、ホームページ上に公開しています。アクセスし易くすることで、高岡の魅力を再発見し、次世代につなげます。



高岡の
古文書資料

高岡市立中央図書館 〒933-0023 末広町1-7
高岡市立伏木図書館 〒933-0104 伏木湊町13-1
高岡市立戸出図書館 〒939-1104 戸出町3-19-29
高岡市立中田図書館 〒939-1272 下麻生1108
高岡市立福岡図書館 〒939-0132 福岡町大滝44

TEL (0766) 20-1818 FAX (0766) 20-1819
TEL (0766) 44-0073 FAX (0766) 44-0073
TEL (0766) 63-1254 FAX (0766) 63-1254
TEL (0766) 36-0054 FAX (0766) 36-0054
TEL (0766) 64-1034 FAX (0766) 64-1038